

丹沢大山総合調査を終えて

新堀 豊彦*

Results of the scientific research on the Tanzawa Mountains
and the prospect for conservation plan

Toyohiko SHINBORI*

山は荒れている。かなり深刻な状況といえる。今回の調査で、何回か丹沢に入ってみたが、その生態系の変化は恐ろしいほどであった。

～実行委員会の運営とその成果～

私は前回の「丹沢大山自然環境総合調査」には、企画委員長と昆虫の調査員の一人として参加し、それ以来、ほぼ10年県の「丹沢大山保全計画」づくりのお手伝いなどしながら、今回の「丹沢大山総合調査」の終了まで、間断なくずっと丹沢にむかいあってきた。

1940年代から丹沢に親しんできた丹沢ファンであり、また昆虫調査の関係でも数十回に及ぶ入山をくり返してきたものとして、愛着の深い丹沢の悲惨な状況について心を痛めてきた。

それだけに、今回の調査が実質的に丹沢の再生につながることを祈り、また再生されることを信じて、2年有余の調査とその結果に期待していたものである。

今回は、今までにないスケールで取り組んだ実行委員会であり、調査団であった。8つの重要な課題に絞られてはいたものの、そのいずれもが、かなり大きく難しい課題であった。殊に「山のなりわい再生複合戦略」などの新しい、いわば人文科学的なアプローチで丹沢の荒廃に迫ったことや、県民参加を大原則として謳い上げての幅の広い調査となったことは、運営の内容や調査報告をまとめるのに従来にない難しさを加えることになったといえるだろう。

しかしながら、各分野の専門家の先生方をはじめ、

山岳関係諸団体や企業まで含め、大変な御協力をいただき、大きな盛り上がりを見せるに至ったのはたぶん初めてのことでなかったかと思われる。

おりしも県として、水源環境の保全再生が大きな課題として政治・行政の取り上げるところとなり、その中心に丹沢の存在がクローズアップされ、「丹沢再生無くして水源環境保全はあり得ない」という雰囲気も醸成されたのである。今後も、丹沢と水源環境は一体不可分の関係として県政における重要な政策課題になることは間違いないところである。

それにしても、横浜事務局（緑政課）と厚木事務局（自然環境保全センター）のフォローは、行政としてやれるところまでやったという充実感があったのではないかと。いや実際には様々な要求や課題につ



写真1 丹沢大山総合調査実行委員会による
政策提言を知事に手渡す筆者

* NPO法人 神奈川県自然保護協会（〒232-0017 横浜市南区宿町3-54 メゾンド蒔田 1階）

いて、実行委員会や調査団から難題がふきよせ、御苦労も堪えなかったものと推察はしている。この点は深くその労に敬意と感謝の意を表するものである。

また同時に、調査団に参加した約500名の調査員は、極めて高い研究意欲に支えられ、2年余の短期間としては可能な限りの成果をあげられたのではないかと。勿論、この種の調査は学術的になればなるほど、時間が必要とされる。一定の時間制限下では決して満足されるところまで十分な結果をもたらすことは、困難であろうことも理解できるのであるが、今回できあがった1,200頁に及ぶ「学術調査報告書」の内容は立派なものであり、すべての分野において、充分評価されるに足るものであったと思う。

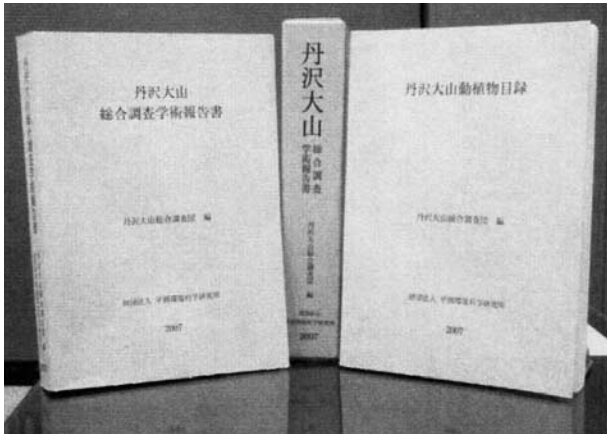


写真2 丹沢大山総合調査学術報告書

～学術報告書の活かし方について～

既に、「丹沢大山自然再生基本構想」(2006)にもとづき、新しい「丹沢大山自然再生計画」(2007)がスタートした。

これは、2年余の調査のプロセスにおいて論議され、検討されたナマの知見が盛り込まれており、前回の「丹沢大山保全計画」の轍を踏まないように極めて注意深く、様々な配慮がなされている。そのため、今回の調査の意義が十分に活かされているものではあるが、一方で「学術調査報告書」が完成する一年近く前に、かなり急いで練り上げなければならないと

いう、行政上の時間制約の下で立案されたものでもあるので、今後、この「学術調査報告書」は、関係者によって詳細に総合解析がなされなければならないところである。

私自身、到底あれだけのヴォリュームのものをすべて解読することは不可能であるが、少なくとも、各分野の専門家の方々によって、分野別の検討が行われ、かつ、分野を横断しての論議も行われなければならないだろう。

私が一番注目したのは、「ブナ林の再生に向けた総合解析」の項(P703～)であり、丹沢再生における象徴的な重要な事業についての方向性が示されている。しかしながら、調査結果自体、まだ不十分ということも書かれており、大気汚染に関する対策やブナハバチの大発生に対する防御策などについては、未解決のままである。また、ニホンジカへの対応策も、今ひとつ物足りなさが感じられる。

調査が、調査だけに終わってしまっただけでは意味がない。今後モニタリングを充実させ、状況を正確に把握してゆくことは絶対に必要である。

そして最後に、調査が終わってもうひとつ驚かされたのは、里山におけるツキノワグマの頻繁な出没であり、その射殺事件であった。丹沢における希少種中の希少種が、何故こういうことになったのか、我々の予測していなかった事態が発生したといえるであろう。

気候変動 - 温暖化の問題を含めて、自然界には、何が起るかわからない難しさが秘められている。いずれにせよ、今回の貴重な調査の成果の上になつて、より精緻で科学的な再生計画を県はつくり上げ、政策を実現していかなければならない。勿論、それは県民と共に協働して推進していくべきものであり、さらに我々に課せられた責任の重さを真摯に受けとめなくてはならないだろう。

(丹沢大山総合調査実行委員長)